東通小学校５年生 稲刈りに挑戦





稲刈りに挑戦する児童たち

東通小学校５年生は、総合的な学習「東通科」の一環として、毎年、地元農家の協力を得ながら、目名地区の田んぼで米作りを学んでいます。

９月２４日、初夏に田植えをした稲が黄金色に実り、稲刈りが行われました。児童たちは、鎌を使った昔ながらの手作業による稲刈りを体験し、約１２０ｋｇの稲を収穫しました。児童たちは、稲の根元に鎌を入れ、一株ずつ丁寧に刈り取っていきました。慣れない作業に苦戦しながらも、次第にコツをつかみ、刈り取った稲を協力して束ねました。

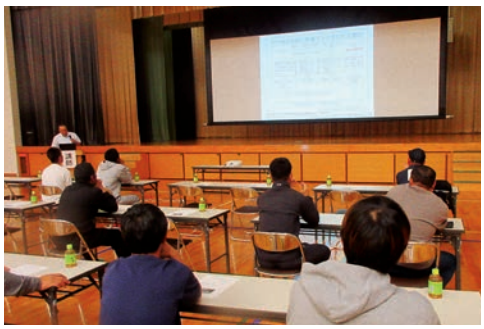
児童からは「最初はできなかったけれど、上手にできるようになった」と、達成感に満ちた感想が聞かれました。また、講師を務めた農家の山崎 孝悦さんから、米の品質管理や、付加価値を付けて販売するための工夫について学びました。

児童たちは、田植えから稲刈りまでの作業を通して、食の大切さや村の農業について学ぶ機会となりました。

漁業連合研究会 サケ漁況の見通しに係る研修会 開催



講師の大水調査研究部長



熱心に耳を傾ける参加者の皆さん

村内のサケの漁獲数量及び金額

年度	漁獲数量（kg）	漁獲金額（千円）
R3	186,800	213,320
R4	137,840	133,861
R5	55,967	58,795
R6	32,436	37,754
R7	12,263	21,504

参考：2026年版東通村統計資料

９月２９日、村体育館において、東通村漁業連合研究会（林 良一 会長）の研修会が開催されました。研修会では、地方独立行政法人 青森県産業技術センター 内水面研究所 調査研究部長の大水 理晴 氏が「サケ漁況の見通し」について講演しました。講演では、過去の河川回帰尾数、沿岸漁獲尾数と年齢構成や海況予報等を基にしたサケの回帰予測について説明があり、今年の来遊は、昨年を更に下回るとの見通しが示されました。また、海洋環境の変化に対応できるよう、野生魚を利用した稚魚の生産放流試験等、県内の孵化（ふか）場の取組も紹介されました。近年、サケ漁は大変厳しい状況が続いていて、河川でのサケ捕獲数も減っていることから、大水氏は「海産親魚の確保が非常に重要であり、回帰する４年後のために、孵化場での適正管理や適期放流等、対策していく必要がある」と説明しました。

ここ数年、サケの不漁が続いていることもあり、参加者は熱心に耳を傾けていました。